羽仁吉一について
――「家庭」思想の源流を求めて――

栗原　葉子

はじめに

「家庭」とは、古来より人類に普遍的な自明の存在であると思われがちである。

だが、近年の家族研究のめざましい進展によって、「家庭」は自明のものではなく、近代が生み出した「歴史的産物」であることが明らかにされた。この認識の上に家庭研究も深化しつつある。けれども家庭といえば、その典型的展開を見た大正時代に焦点があてられ、明治期のそれについては雑誌の家庭論分析を主流としていて、家庭論を輩出させた社会思想的な脈絡そのものについては十分な考察が及んでいないのではないだろうか。

私は、「家庭」という思想を、可能な限り当時の人々の意識の深層にまで立ち入って明らかにしてみたいと思う。その一方法として時代をいわば体現した羽仁吉一に着眼した。この小論は吉一の輪郭を考える上での基本的土壌のひとつとして調査した、吉一の母方内藤家をめぐる報告を主目的とするものである。ただし、知られることの少ない人物を対象とするので私の意図を明確にするためにも、その報告の前に何故いま羽仁吉一なのか、何故いま家庭なのかについて説明する必要があろう。小論前半部はこの二つの問いをめぐる説明となっている。従って小論は、前半部と後半部の報告とが論理的に継続展開する構成とはなっていない。あらかじめ断っておく。

1．吉一と「家庭」

羽仁吉一は、教育者羽仁もと子の夫、歴史学者羽仁五郎の義父、映画監督羽仁進の祖父といったように、続柄と「～の」の所有格付きでなければ知る人は少ない。妻もと子と共に『婦人之友』創刊と自由学園創設。出版と教育の二分野にわたって大事業をおこし、全国にその愛読者組織「友の会」を結成。明治

から大正と昭和を経て、現在もなお、ほとんど創設時と変わらぬ形態でそれらの活動は継続している。その息は長く、広く、深い。社会への影響力は看過できず、そこで提示された家庭思想は、無意識であれ、今日の我々がもつ家庭イメージの一端を形作っているといっても過言ではないだろう。[1]

活動が広汎にわたるゆえに、羽仁についての研究も、ジャーナリズム、教育学、女性史学、家政学、建築学など多分野からの蓄積が既にある。だが、それらの研究は第１に、もっぱら妻もと子の側から論じられ、吉一の人物や思想に照明が当てられたものは無に等しいのが特徴である。[2] また第２には、否定的とは言えないまでも消極的、限定的評価に傾いている点があげられる。思想がプチブル的だという階級的限界の指摘、女性を家庭役割に固定化する保守性や、戦争時に翼賛思想の一端を担う過誤をおかしたとの批判や、家計簿の独創性をめぐる疑惑などである。[3] だが、娘婿、孫、ひ孫と著名人の連なる名門羽仁一族が現存し、その事業経営が今も進行形である事情からか、内部からの客観的評価や批判が躊躇されていることが第３の特徴として指摘できる。これに対して、(1) もと子ではなく吉一を、(2) 否定でなく肯定的評価を、(3）内部でなく外部からの視座で、というのが私の立場である。

明治 20 年代における「家庭」という語の登場と普及は、生活の質と内容が「問題」として人々の意識に上るようになったからにほかならない。その土台の上に明治 30 年代半ば、吉一・もと子はまさしく彼らの実生活そのものを原点として「家庭」という思想を生み出した。それは広い意味での民主化運動であり、文化運動であり、あるいはイデオロギーを前面にかかげない女性解放であり、市民運動のひとつであったと言えるのではないか。家庭崩壊や家族危機が叫ばれてから既に久しい昨今の現状にあって、羽仁の家庭思想が持っていた理想主義的提言は、豊かな示唆を含んでいるように思われる。限界性を指摘するより、それが持つ意義を再点検して汲み取りたいと私は思う。

吉一はもと子のカリスマ的知名度とは裏腹に、社会的にはほとんど無名のままだった。というより、妻を前面に押し出し自らは陰になることを楽しんだというべきだろうか。吉一は妻もと子については実に多くを語ったが、自身については長女説子が父は「自分を語るということをしないひとでした。それを、趣味にしていた、といえるかもしれません」[4] と記したように自らの姿を消去した。とりわけ上京前の伝記的事実については全く沈黙していて、周辺的で断片的な間接的手掛かりしかない。しかし、二人の事業は夫婦が「まったくの五分

五分」に「独立の持味で対抗し」[5]ていた。墓碑にも刻まれた標語「思想しつつ生活しつつ」通り、彼らの人生は生活者として自ら問う「家庭」の創出と生成過程そのものであった。もと子の「突発的で光の閃き」のごとき優れた創意は、それを「現実の生きた歴史として成り立たせる」[6]吉一の存在なしにはこの世に存在しなかった。家庭生活が一対の男女の営みの上に成り立つものであるならば、文字通り生身の肉体を持った吉一・もと子が協業で創出生成した生活過程の記録としての「家庭」思想の正当でトータルな把握と評価は、夫吉一の側からも論じられねばならないと考えるのはしごく当然の成り行きであろう。明治13年生まれの男性が、日常生活のありようを実践生活者として問うこと自体が、既に革命的な問いかけを含んでいるのである。

同郷の志士たちが天下国家の夢にかけて奮迅した明治に長州の地で誕生し、漢学や儒学的素養の伝統の中に育ち、上京後には新聞記者を目指し将来を嘱望されたこともあった青年吉一が、もと子との出会いを通じて（1）「国の家」ではなく家庭という「小さな家」へ、（2）男性ではなく女性へ、（3）新聞や総合雑誌などマス・コミではなく女性雑誌というリトル・マガジン[7]へと、志の向きを大転換した。今から120年も前に、そのような吉一を誕生させた謎の解明は、吉一を直接知る人々が高齢化している現在、残された資料や聞き書きなどを通じて早急に記録として書きとどめておかなければ、という緊急性こそがこの論稿をまとめる直接の動機となった。

家族や家庭を研究対象とする研究者には女性が多い。家族や家庭の問題が男性より以上に女性にとってより身近で切実な問題あるという現実を反映している。また、家庭の問題は、たった二人ながら社会の男女の関係構造を濃密な形で映し出すという意味で、すぐれて夫婦という男女の問題でもある。駒尺喜美と黒沢亜里子[8]が両氏ともに、もし近代日本男性史というべきものが書かれるとすれば、間違いなくその中の一人にあげられるであろう高村光太郎を研究題材として、光太郎と智恵子との関係性を問わずにいられなかったのも、このためであろう。妻智恵子の立場から逆光をあてて見れば、フェミニスト光太郎にさえ違った風景が見えてくる。両氏の切り口は鮮やかで衝撃的な印象を残した。だが、両氏の光太郎論に盛り込まれた男性への絶望と断罪のメッセージではなくて、むしろ男女の関係構造についてのプラスのメッセージを提示していきたいというのが、私の基本的立場である。[9]南原繁は「ひとりの優れた個性、しかも女性の生涯が、かくまで祝福され、用ゐられたことは、わが国近代の歴史

において、一つの大きな驚異といはなければならない。それと同時に、その傍らにあって、絶えずこの女性を助け、むしろ実際の計画と運営に当たってこられた」[10] 人と吉一を評した。羽仁吉一の名もまた、日本近代男性史上に明記されるべき一人ではあるまいか。

冒頭にも記したように、近年の家族研究は近代家族の特徴として、(1)一家団欒の構図、(2) 母子間の強い情緒的絆、(3) 消費の場・生命再生産の場としての「家庭」が女性の領域とされる一方、生産の場としての職場が男性の領域とされるという領域分離と性別役割、以上の３つを挙げている。また、そうした近代家族は時代をこえた普遍的なものではなく、歴史的産物であることも研究によって明らかになったのであった。「家庭」という語は、従来の「家」家族とは異なる新しい家族の様態を示す言葉として、まず言説の中に登場した。それが私たちが知るところの「家庭」へと実態化されたのは大正前半期であり、その主体者となったのは産業化進展に伴う急速な都市化、情報メディアや交通の発達を背景として台頭した新中間層家族であることも、既に広く了解事項となっている。

社会学者牟田和恵は明治期の総合雑誌を分析し、明治 20 年代後半から急速に「家庭」論が流布していったが、逆説的なことに、「家庭」論は普及すると同時に、公論から除外されて「私化」・「女性化」されていったと喝破 [11] した。また、女性史家の小山静子は「家庭」実態化の時期として大正時代半ばの第一次大戦後に着目。産業化によって女性をめぐる状況が流動化してくる中で、家庭思想の普及は一方では女性を家庭内に拘束する桎梏となったが、同時にそれは国家による女性の近代的国民化過程であったとした。[12] 家族は「近代の「国民」として社会化するエージェント」で、近代とは「「家族」が特権化する時代」[13] とは牟田の言葉であるが、家庭を国家と切り結ぶ関係において捉えようとしている点で、牟田と小山は共通する。その炯眼から学ぶものは多い。だが、ともに日露戦争前夜の明治 36 年頃については実質上ほとんど触れていないのは何故だろうか。家庭が「憧れ・羨望の、あるいは娯楽の対象として民衆にとって確かに自発的な感情移入ができるものであったからこそ、「家庭」イデオロギーは人々の心性を私的な極から、「国民」として社会に編入していく役割を担った」[14] と牟田は述べる。私が関心を持つのは、両氏が着目した国家と切り結ぶ線上の極にではなく、むしろ牟田の言うところの「私的な極」の方にある。家庭という言葉が明治 20 年頃から頻繁に使われはじめ、新しい革袋に新しい酒が必要な

ごとく、その中味としての新しい家庭の在り方が論じられた。「家庭は存在する前に語られるもの」[15] であった。だが、言説としての「家庭」から実態化された「家庭」への移行は、言うまでもなく徐々に進行した筈である。とすれば、明治20年代と大正期の第一次大戦頃とに挟まるおよそ20年間の期間の、「家庭」の思想と実態は、まだ不明のまま残されていると言えるのではないだろうか。

明治 36 年 4 月、全く時を同じくして堺利彦は『家庭雑誌』を、羽仁吉一は『家庭之友』を刊行した。後に堺は自他公認の社会主義者となり二人の軌道は大きく分かれたが、ともに下級武士の家に生まれ、漢学的儒教的倫理観を体得し、新聞記者を目指し、理想主義的な社会主義的関心を抱いた。共通点が多い二人だが、特に関心をひくのは彼らが「家庭」を傍観者としてではなく、生活者としてその創出と生成を実践したという点である。いわゆる大正「家庭文化」期をほぼ 20 年溯る明治 30 年代半ばに、二人が同時的に登場したことは、実態としての「家庭」像を考える上で示唆的である。

人間は社会の制度や政治やイデオロギーに拘束され、それによって変容を余儀なくされる存在であると同時に、そうした制度やイデオロギーの如何とはほとんど無関係にうごめく情動やさまざまな卑近な事情に左右されても生きている。まぎれもなく身体をもち暮らしを営む存在である人間が、生きることにリアリティや充足感を実感するのは、日常の「私性領域」における身体にかかわる部分ではないだろうか。「家庭」に着目した私の視座の基底を支えているのは、このような思いである。

2．吉一の母方

吉一の生涯にとっての決定的転機には、もと子との出会いがある。もと子ほど与えられた価値基準や思考枠に囚われず、「思うことは実現したい」の前向き楽観主義の一心で、発意のままに存分に生きた女性は多くはないであろう。その強い個性と創意をなくしては出版と教育にまたがる大事業はもとより存在し得なかった。しかしながら、どのように優れた発案も、それを実現させる具体的な方策なくしては、ただの突発的な閃きに終わって消えてしまい、社会に成立しえない。

もと子より３年遅れて報知新聞社に入社してきた長身美丈夫の青年吉一は、その翌年、背丈がその半分もなく７歳も年上の離婚経験のあるもと子と結婚を決意した。長女説子は父母の出会いについて「新聞編集への未練以上のものを

持っていた」父が、「その心をゆさぶるような仕事への未練よりも、決して美しい容姿の人でなかった母の魂のなかに、優れた永遠のものをみて、それに魅せられ、志をまげて悔やむところがなかったのだと思います」[16] と言う。もと子は幼時より「手は人並み以上に遅く無器用で、頭は人並み以上に綿密であった」[17] から、新しく始まった家庭生活のなかでも、家事も裁縫もひどく不得手なもと子は困難を極めた。しかし、もと子には「私にはできないことが、じつは大切なことではないか」[18] と考える独特の発想があった。また、後に表明したように、自己の内心を堂々と表現する勇気と自立性と自由さの点において平塚雷鳥らの「新しい女」に賛辞を送ったが、日本女性の三分を占める「空虚な癖に生意気な」新しい女よりも、「七分のボンヤリしている女」をどうしたら覚醒できるのかの方がもっと重要な問題 [19] とするところに、もと子の立脚点があった。主に取材と執筆はもと子が、編集を吉一が担当して刊行した雑誌は、理想的家庭を求めて男女が相互に協力しあうプロセスを重視する思想に貫かれ、それも単に抽象的段階で終わらせず、実用的な生活次元に目をむけ、実行しうる方策を具体的に提案するものだった。それは当時の女性たちに、所与の生活をただ受け身で忍従するのでなく、主体的に自覚的に改革できるのだという激励と希望を与えた。従来の女訓的な雑誌や文芸的雑誌とは異なり、実生活を実験場として練り出された創意による記事内容が強く読者の心を捉えたのは、むしろ当然のことであったろう。

ここであえて私が注目したいのは、明治 30 年代半ばという時代にあって、家事不得手の離婚経験のある７歳年上のキャリアウーマンもと子を伴侶に選択し、天下国家を論じずにむしろ「女・子供のこと」であった小さな家＝「家庭」を主題とする雑誌の発刊を、妻と協業で実践した吉一という男性の人物と見識についてである。吉一ともと子は出身が本州の最南端山口と最北端青森県八戸と正反対であるように、気質も好みも風貌もまったく異質であった。明治６年生まれの妻の才能を見抜き、それを存分に生かす環境作りを人知れず軽やかに行った吉一という男性の近代性や先見性はいったいどこに由来しているのだろうか。以下の記述は、吉一の母イヨの実家・内藤家をめぐる調査の報告である。[20]

吉一は父羽仁鶴助と内藤家から嫁いだ母イヨの間の長男として、明治 13 年 (1880) に現在の防府市三田尻に誕生。鶴助は藩主毛利家の隠居した殿様のお花やお茶の相手をしていた人で、「武士の家としては格式ばらない、文化的な雰囲気をもっていた」[21] 家庭であった。身分としては下層武士出身ながら、仕事柄

上層階級の人との接触が多い。吉一のある種の気品や一流趣味は、自己抑制的な謙虚さや温和さ社交性などを必要とされる立場にあった父から伝えられたのだろう。また、羽仁家の長男である吉一が離婚経験のある７歳年上の女性と結婚するとなれば、「少しは悶着があってもふしぎはないとおもいますが、文句もでないほど、家をはなれて、独立独歩の生きかたをしていたのであろうとおもいます」[22] と説子は記しているから、家父長的権力をふるう父ではなく、吉一も親の干渉を許さず自主的自立的であったことが窺える。鶴助は妻イヨに対しても同様であったようで、キリスト教の影響によるものか、鶴助・イヨ夫婦が対等的なことも注目される点である。　イヨは明治 43 年に三田尻で自らキリスト教に入信するが、その後鶴助は妻に誘われて受洗し、イヨと共に教会で重要な役目を果たしている。[23] 説子は祖母イヨの言葉として、「おじいさんもその気になり、家中で洗礼を受けることになった。そうなると、おじいさんにはいろいろ仕事のかかわりあいもあり、うるさいこともいわれるようになった。けれど、私たちはかたく決心したのだし、それを中途でひるがえすことはできない。また、私は嫁として、御先祖からのお位牌をあずけられている。といっても、いまはもう、偶像をおがむことはできないからとおもって、決心して、お寺にゆき、事情を話して、永代の御香料をおさめておねがいしてきました」[24] と記している。また、イヨを「さっさとよく働く」「嫁である私の母の忙しさというか、ものを考える人なのだから世俗のことで煩わしてはいけないということを知っていてよい意味で敬遠している、かしこい姑でした」[25] と形容している。これらの記述から窺えるのは、因習に囚われない自由で進取の気性、自分の意志を貫く合理性と意志力、堅固な決断性というイヨ像である。

　イヨの実家は現在は防府市に含まれる佐波郡牟礼村で、市内最高峰の大平山のふもとにある。内藤茂平と同村の松井治右衛門の長女すゑとの間の次女として万延元年 (1860) 誕生。イヨと８歳違いの姉長女ヨシが内藤家を継ぎ、その直系 10 代目に当たる内藤恵子さんが今も牟礼に在住されている。見せて頂いた内藤家の系図や戸籍や写真及び聞き書きを合わせて、吉一に連なるものとして浮かび上がったことをまとめれば、(1) 合理的・進取の気性、(2) 美人の系譜、(3) 女系の家という３つにまとめられるだろう。これらは説子の描写から推察されるものと重なりあう。内藤茂平は子供がヨシ・イヨの娘二人だったため、長女ヨシに婿養子を迎えて内藤家を継がせ、イヨは 17 歳になった明治 10 年に羽仁家の鶴助に嫁がせた。吉一にとってヨシは母方の唯一の叔母である。父方

には叔父一人が存命していただけであるから、一般的通念や慣習からしても吉一は母方内藤家の従兄弟姉妹とはとりわけ親しい関係であったと思われる。吉一の叔母ヨシの夫幸助は、素封家内藤家を維持発展させる才覚に長けた人物であったらしく、ヨシとの間にできた三男三女のうち息子たちはいずれも当時最先端の進取の気性に富む仕事に就いている。財政豊かな内藤家には、新奇なものや広い世界への関心を覚醒させる精神的余裕と土壌があったのであろう。吉一は故郷や身内について完黙しているため、わずかな資料から推量を重ねるしかないのであるが、吉一の末弟賢良が内藤家の昭三（吉一の従兄弟清一の息子）に語った話として、「子供のころ、兄（吉一）と夏休みには内藤へ行ってよく遊んだ思い出がある」という。少年時代に吉一は 13 歳年下の幼い弟を連れ、国分寺や国衙跡を通って大平山のふもと牟礼への道を歩き母方の実家を訪れたのだろう。とりわけ３歳年上の従兄弟内藤清一とは親しい間柄だったようである。吉一のある種の気宇の大きさ、穏やかさ、清澄な資質は、阿弥陀寺や大平山の風景から受ける印象と符号していて、吉一と内藤家との親密な関係を裏付けるようであった。

その親密な関係は、私の調査で初めて発見された生命保険証２通と借用書２通の資料で立証されるのではないだろうか。しかもこれは吉一上京前後の微妙な時期に重なっているから、不明な足取りを補足する一証拠となる可能性もある。当時の素封家の常として、幸助は多数の人に金銭や田地を貸しているが、その中に羽仁鶴助、吉一、政之助（鶴助弟）の名前が見える生命保険証書や借用書が存在する。生命保険証書の１通は鶴助が保険契約人、イヨが受取人となった明治 29 年 8 月 29 日加入の金百円の生命保険証書。もう１通は吉一が被保険者で鶴助が契約人及び受取人になっている明治 31 年 4 月 28 日付け保険金百円の生命保険証書である。前者は保険期間が明治 47 年までの満 18 年間の養老保険で、掛け金は半年に 2 円 99 銭で、払い込み期間は鶴助が 64 歳 8 カ月になる受け取り年齢まで。嘉永 3 年 (1850) 生まれの鶴助が満 18 年目で 64 歳になる明治 47 年とは大正 3 年 (1914) に当たる。証書には万が一中途で死去の場合はイヨが受取る旨の条項書きがあるが、鶴助は満期の翌年の大正 4 年に 65 歳で亡くなっている。なお、この直前に鶴助は一時上京して新築したばかりの吉一の目白の家に行っている。時期的に言えば鶴助が生前に受け取っている筈であるが、証書が今も内藤家に残っているということをどう解釈すればいいのだろうか。もう１通は「四拾五歳請取養老生命保険証券」というもので、保険料は

半年ごとに１円 59 銭１厘。その支払いは明治 57 年 10 月 28 日を最終日とする旨の記述がある。なお明治 57 年は事実上存在しない。年数からは大正 14 年にあたる。吉一が目白の自由学園が手狭になったため、郊外の南澤に学園用の土地購入を開始した年に当たる。

これら生命保険証書とは別に、罫線のはいった和紙に流麗な筆文字で書かれた内藤幸助宛の借用書と、約定書の各１通がある。明治 32 年 9 月の借用証書の方には、上述の生命保険証書２通に加えて鶴助名義の 90 円の定期預金証書の３件を担保に、鶴助の名と印により、幸助に田地を借用する旨の内容。借用するのが現金でなく田地である理由はよくわからないが、恐らく田地を金銭に換えたのであろう。もう１通の借用書は明治 36 年 9 月西村友八（名前から察するに、吉一祖母タ子の実父西村伊八の弟か）と、羽仁政之助の印があるもので、田地と畑地の広さ及びその地価の記述がある。幸助のそれを借りて抵当にし、金銭を借りたと考えられる。詳細は不明だが、保険証書と同様、今も内藤家に残っていることからすると、通念では吉一（もしくは鶴助）はイヨの実家内藤家に経済的援助を仰いだものの、借りたまま返却しなかったということになる。なお、36 年は『家庭之友』創刊の年である。また、２通の生命保険は掛け金だけで、半年１円 59 銭１厘と 2 円 99 銭だから、あわせて年間ほぼ 10 円近くの支払いが必要である。掛け金を途中で支払わなくなった可能性も考えられるが、一方内藤家には後々まで『婦人之友』が送付され続けたこと、盆暮れの挨拶や贈り物など穏やかな友好関係が両家に継続したこと、また「羽仁家からは律義に返却してもらった」などの話が内藤家に今も伝えられている。

ともあれ、鶴助は日露戦争５年前の明治 32 年の時点で 90 円の預金をもっており、かつ、親子で合わせてほぼ 10 円の掛け金を支払う生命保険に加入しているのであるから、吉一が上京の折りに周陽学舎の先輩である米問屋梶山升次郎から経済援助を仰いだという話[26]には少々疑問が生じてくる。餞別としてならともかく、その時点の羽仁家は上京資金に欠くほど貧困ではない。また、隠居した殿様にお茶やお花の相手をしていたという鶴助が、慣れない農業仕事に手を出すために田地を手にいれる生活設計をしたとも考えにくい。田地を現金化してまとまった金額を必要とした理由は、鶴助と弟政之助との間に何らかの事情があったか、あるいは鶴助個人の事情や吉一の上京など資金を要する何かの事情が重ね合わさったことも推察されるが、いずれも推察の域を出るものではない。なお、鶴助が代々の信仰を捨ててクリスチャンになったためか、後に鶴

助弟の政之助が羽仁政平の養子となり、政六→柳助→鶴助→吉一と連なる羽仁直系の系譜に代わって、三田尻に在住して羽仁家の系譜を守った。

イヨは最晩年には三田尻を引き払って東京で暮らしたが、嫁のもと子については「世俗のことで煩わしてはいけない」とキャリア・ウーマンもと子の忙しさを理解する姑であった。また、イヨは仏教徒だった羽仁家にありながら、明治末年に自らキリスト教に入信し、のみならず夫も入信させたが、羽仁家の先祖の位牌の永代御香料を払ってお寺に供養を依頼して嫁としての義務を果たし、その一方では因習的な周囲の批判にめげず、自らのキリスト信仰を貫き通した人であった。当時としては、奇異とさえ思われたであろう女性雑誌記者もと子の生き方や、目新しい共働き息子夫婦の在り方を、封建的で世俗的な価値基準で測らなかったイヨの開明的な資質は目立たないようだが特筆に値する。吉一は慎重な人であったが、大胆に決然と自己の意志を開示し、決断した以上は貫き通す堅固さも特徴的である。そうした気質も母譲りなのかもしれない。内藤家 10 代目当主恵子さんの子供は３人とも娘の女系である。恵子さんは「父清も祖父清一もいわば素封家のご当主で、農業をこなしたり家を切り盛りするなど、実際の仕事はしっかり者の女たちの手によっていて、婿を迎えた方が内藤家は発展するのだ」と語る。「女系の家」説は美人系譜説と並行して、ひそかな誇りをもって今も内藤家に伝わっている。17 歳で羽仁家に嫁したイヨもしっかりものだったのだろう。説子が「さっさとよく働くおばあさん」と、イヨと母に自分の姿を重ね合わせて、羽仁家を「代々、女の開拓した家庭というわけかしら」[27] と語ったセリフは、恵子さんからの聞き書きのセリフと一致している。羽仁家の中にイヨは内藤の「女系の家」の伝統を伝え、イヨの息子吉一はもと子との「対」の関係にそれを引継いで開花させた。妻もと子の才能を生かし、「家庭」思想の創出と生成に力を注いだ吉一の源流は、母方内藤家にあったと考えてよさそうである。

吉一は「春日明暗」[28] に珍しく主情的な文章で、「母は質実（じみ）で謙遜な人であった。」「派手なことの嫌いな人であった」と形容し、息子夫婦の事業に一生の祈願をかけてくれて心の支えとなってくれた母の逝去に、「心は寂しい」と記している。

註

1 天野貞祐「悲嘆は学園の親愛を困惑は勇気を生むべき」(羽仁恵子編『羽仁吉一先生逝去 20 年にあたって』発行所無記、1975 年) 6-7 頁。

2 管見によれば、吉一についての先駆的研究として笠原芳光の「女を生かした男」(鶴見俊輔・山本明編『抵抗と持続』世界思想社、1979 年)「羽仁吉一の先祖と郷里」(『キリスト教社会問題研究』第 29 号、1981)、「『六合雑誌』と『青年之友』における羽仁吉一」(『キリスト教社会問題研究』第 30 号、1982 年)と、自由学園出身の高橋和也の「防府人物記自由学人羽仁吉一先生」(『ほうふ日報』1996〜7 年)の外は本格的な研究はない。

3 「友の会」を巡って読者と雑誌編集者との幸福な連帯感を羨望した津野海太郎の「雑誌の読者が「同志」だった時代」(『近代日本文化論』第 4 巻、岩波書店、1999 年) 参照。

4 羽仁説子「父の思い出」(『婦人之友』12 月号、1955 年）17 頁。

5 羽仁説子『私の受けた教育』(婦人之友社、1963 年）49 頁。

6 長谷川如是閑「半世紀の老友として」(羽仁恵子編『羽仁吉一先生逝去 20 年にあたって』発行所無記、1975 年) 3 頁。

7 笠原、註 (2) 前掲論文、37 頁。

8 駒尺喜美『高村光太郎のフェミニズム』(朝日新聞社、1992 年)。黒澤亜里子『女の首』(ドメス出版、1985 年)。

9 栗原葉子『伴侶』(平凡社、1999 年)参照。高群逸枝の夫橋本憲三の評伝である。

10 南原繁「建業 50 年に寄す」(『婦人之友』4 月号、1953 年）23 頁。

11 牟田和恵『戦略としての家族』(新曜社、1996 年）54 頁。

12 小山静子『家庭の生成と女性の国民化』(勁草書房、1999 年）参照。

13 牟田、註(11)前掲書、155 頁。

14 牟田、註(11)前掲書、183 頁。

15 小山、註(12)前掲書、はしがき。

16 説子、註(5)前掲書、15 頁。

17 羽仁もと子「半生を語る」(『羽仁もと子著作集』第 14 巻婦人之友社、1981 年版)8 頁。

18 羽仁進『自由学園物語』(講談社、1984 年) 34-35 頁。

19 羽仁もと子「今の女の真相」(『羽仁もと子著作集』第 2 巻、婦人之友社、1975 年版) 206 頁。

20 筆者調査による短い報告を地元紙の『ほうふ日報』に 2001 年 4 月 3 日と 7 日付で連載した。この調査は、同市内に在住しながら面識のなかった現在の羽仁家と内藤家が 120 年ぶりに対面する契機となった。羽仁正人氏と内藤恵子さんには多大なご厚意を戴いた。感謝の念をここで表しておきたい。

21 説子、註 (5) 前掲書、21 頁。

22 説子、註 (5) 前掲書、26 頁。

23 島本久恵『花と松柏』(筑摩書房、1976 年）53 頁。

24 説子、註 (5) 前掲書、197 頁。
25 説子、註 (5) 前掲書、195 頁。
26 高橋、註 (2) 前掲新聞記事、1997 年 6 月 5 日付。
27 説子、註 (5) 前掲書、197 頁。
28 吉一、註 (17) 前掲書上巻、112-113 頁。